



戸井 十 月

(イラストレーター・ベ平連)

潜入 ジェーン・フォンドの日本行状記

興味本位の目でもむけようものならハリ倒さ
んばかりに脱みかえしたフォンドの心意気

ジェーン・フォンドがやって来る!

「輪舞」「バーバレーラ」で見たあのセクシー女優がやって来る。まず頭の中にひらめいたのは正直言ってこんな事であった。しかし、これが間違いの始まりなのだ。まず第一に、J・フォンドがやって来るのではなくFTAというグループがやって来たのである。フォンドはキャストの一人にすぎない。第二に、彼女は男の欲望に応えるセクシー女優ではなく、闘う人々に応える一人の活動家なのだ。彼女を実際に見ているうちに感じたのだが、この誤ったイメージこそが彼女にとって一番耐えられないことなのだ(本誌七〇年十月号の手記)。

ではFTAとは一体何か? Free Theatre Associates (自由劇場協会) というのが正式な名称である。しかしこれは一種のかけ言葉になっていて、Fuck the Army (陸軍のくそをたれ) Flog the Army (陸軍をばっばりたたれ) 等解釈の仕方は色々ある。しかもFTAの語元は軍隊のキャッチフレーズ、Fun, Travel, Adventure (楽しみ・旅・冒険) から来ているという寸法である。

FTAは一九六九年に結成され、全米各地の基地を回り、すでに二万五千人以上のGIを集めている。

彼らは言う、「エンターティナーは、人類が平和と正義という目標へ至るのを、いかにして援助しうるか」と。そしてまたこうも言う「アメリカは世界中にある、だから世界を回るのだ」

彼らが行なうのは公演ではなく、集会であり、運動なのだ。彼らにとって芸とは、とりもなおさず闘争の武器に他ならない。彼らには有名タレントではなく、一人の活動家であり、それ以前に一人の人間なのである。

12月7日。FTA一行を乗せたエールフランス便は4時間遅れて午後10時45分、羽田に着いた。先発隊の映画班(FTAのグループとは別だが彼らの旅を映画化するために行動している)はすでにカメラ・マイクの準備を整え待機している。ひどく重いカメラを女性が構え、男共はウロチョロ雑用をしている。聞いてみると、これもリプの実践なのだそう。

一行は一時間経つても出て来ない。入管事務所がビザの事でイチャモンをつけているとの中間報告が入って来た。彼らの所持してい

る闘争も辞さない構えである。彼ら自身も、長旅の疲れの上こんな仕打ちで元気がない。

この夜、ホテルに10名ほどのGIが訪れ、FTAの一行とミーティングをした。むしろGI運動についてであらう。

話は前後するが、フォンダは別人のようである。別人というのは前に言ったように私たちのイメージにある彼女とは別人という意味だ。とても痩せてしまっている。でもやっぱりチャミングなことに変わりはない。リプの実践か、化粧などはしていないようである。その細身の体に、アノラックにブルージーンという地味な格好は至極板についている。それからこれは前に言ったが、彼女は自分を特別の人間と見られることがともかくいやなのだ。インタヴュー等にはどんな理由があるうとも一切拒否の構えをくずさない。ましてや興味本位の目でも向けようものなら、はり倒さんばかりの目で睨み返してくる。しかし、こっちとしては何としても何か言ってもらいたいのだ。彼女自身の言葉で、彼女自身の口から。それにそんなに誤ったイメージを消し去りたいのなら、自身の言葉で強くアピールすれば良いのだ。ダンマリ戦術じゃあ、

る観光ビザでは、公演は出来ないというのが言い分らしい。だが、どんなに人が来てても彼らFTAにはビタ一文も入らないのだ。いくばくかの収益があったとしても、それは全て運動をしている人々へのカンパとなるのだ。これが公演であろうか。ショウビジネスであろうか。理由は全く別にある。すなわち国益に反する行為をしそうな者は入国させない。入管体制は、その実質的な意味において完成されているのだ。

およそ2時間というものの、私たちはあの忌わしいガラスの壁越しに彼らと無言のやりとりをするだけであつた。ブルーのアノラックに身を包んだフォンダの姿が、時おり見える。一時は絶望的な空気がながれ、彼らが上陸するのは不可能かとも思った。それでも無言の意思表示、すなわちジェスチャーのやりとりは、国境をまさしく象徴する一枚のガラスを隔てて交換された。こちら側で拳を振り上げると、向こう側でもこれに答える。フォンダが外人特有のあのポーズ、両手を広げ肩をすぼめるポーズでこちら側を見る。「もう、しゃあないね」と言った様子である。PCSの一人が出入口の自動ドアを開け、「フリーF

なんともしようがないじゃあないか。一時は私も少々腹が立つたくらいである。これは逆の意味で、一つのスター意識じゃないかとさえ思った。

しかしよく考えてみるとどうだろうか。彼女にしてみれば、一体誰が自分の真意を理解し伝えてくれる味方なのか、あるいは一種風変わりな女優をただ奇異の目で見、スキャンダラスに伝えるトップ屋なかを見分けるのは非常に困難だろう。互いにうちとけ合う余裕があるのならまだしも、この旅のスケジュールはそれどころではない。自分の眠る時間さえ満足にはないのだ。周囲の眼で痛めつけられた一人の女性の姿がそこにあるような気がしたのだ。正直言ってとても怖いのだが、むしろそれが彼女の全てではない。歌の文句じゃあないけれど何が彼女をそうさせたかを考えてみる必要がある。

翌朝9日再び羽田へ。そこでなんと3日間の特別滞在許可がおりたのだ。99パーセントだめだろうと思っていたこちらにとつては、これは奇跡に近い。新聞などでは「入管のイキナ計らい」など書いてあつたが、これも単なる政治的配慮の産物であることを見逃して

「FTA」と叫んだ。拳とVサインの返事がこれに答える。

8日午前0時45分。48時間の仮上陸許可がおりた。入口から一人一人のんびりした感じが入ってくる18名のメンバーたち。地味ながらさすがカッコイイのだ。フォンダはD・サザランドと共に最後に入ってきた。意識して目立たないようにしている感じだ。

女性週刊誌などは、目を血走らせ、今にもヨダレをたらしそうな勢いでフォンダの後を追いまくる。ジェーンちゃん、ちよつと笑って下さいな、ってな調子である。フォンダはこれに対し終始ムツとしていた。まわりにいる者でさえ腹がたつてくる光景だ。

翌朝、再び入管事務所へ。昨日に続き口頭による調査である。ここでの結果はノー。やはり入国させないの一点張りである。

彼らは法務大臣に訴える手続きをとった。3時から行なわれた記者会見で、「私たちは全くびくつきしている。これが単なる事務上の間違いであることを望んでいる」と皮肉たっぷりの声明を発表した。予定は全てオジャン。それどころか強制送還の可能性さえ非常に強い。ベ平連では弁護団を結成し、法廷

はならない。国家賠償でも請求されたら、日米間の関係にも影響する。

フォンダたちはこの知らせを聞いた時、思わず飛び上り、互いに抱きあつたという。

三たび目の記者会見で、彼らは始めて骨のあるステートメントを発表した。

FTAとして、FTAの女性として、FTAの黒人として、の三つに分れているステートメントだが、ここではその女性としての部分を紹介しよう。

アッピール

FTAキャススト中の女性一同は、日本の同胞姉妹、特に米軍内において極端な抑圧と闘っている男女に挨拶を送ります。

米軍内において、女性はひどい性差別を受けています。私たちは女性をその様な差別の下におとしめ、ゆがめていく軍隊に対して強く抗議します。また、米軍が占領しているいくつかの国の女性に対して、軍隊が極端な搾取を行なっていることに抗議します。

私たちは、女性の解放とは何か、を真剣に考えている日本女性何人かと話し、女性としての連帯と自覚を共有できることを、確認し合いました。真の解放は女性一人一人が解放されぬ限りあり得ない——すなわち、男が支配するこの社会において、自らの従属性を放棄して立ち上ることなのです。

「武器だつて取る」

10月。午後12時にホテルを出たチャーターバスは一路横田へ。頭上を米軍機が飛び交う。むろん横田基地から飛び立ったやつだ。午後4時頃、舞台のセットも終わり、報道陣シャットアウトの中でリハーサルが始まった。昨日までの彼らとはうって変わり、実に生々としている。フオンダ、サザラランド、チャンドラーらが舞台の上を飛び回る。撮影する映画班。コーヒーを入れる地元PCSの人々。これでG Iたちがやって来ればF T Aショウの開幕なのだ。

午後6時開場。みるみるうちに定員七百の会場はG Iたちで満たされてゆく。日本人は少しはいるが、80%はG Iたちである。遂には坐りきれず、舞台の前のフロアも解放した。アメリカ空軍兵士、その家族たちの熱気で今や会場は破裂せんばかりである。(横田は空軍基地であり、G I運動も比較的強い所である)。「頭脳警察」ら日本人のロック演奏が終わる、横田基地のG Iが赤帽とロイドメガネで登場、「ベトナムブルース」等のフォークを歌った。仲間が歌うというのでヤンヤの喝采

である。白い犬を連れただひよりきん者のG Iがブツブツとマイクでしゃべる。

軍隊解体を公然と叫ぶ集会に、これまた公然と参加出来る軍隊。これが今の米軍である。逆に言えば、これ位の自由を与えておかなければ米軍は本場に解体してしまうところまで追いつめられているのだ。聞くところによると、30日までの外泊は脱走にはならないという。もうムチャクチャだ。俗に言う進駐軍放送でも、シカゴの暴動の歌やマリファナの歌が流れている。軍隊というものの、あの真空地帯のイメージを持っている私たちにはとうてい理解出来ない。これが近代化軍隊とも言うのだから。

呼び物のショウが始まって連発されるコントに、G Iは拳を振り上げ答える。「ライト・オン!」「フリー・エアホース!」のシュブレヒコールが起こる。福生市民会館は、笑いと合唱と手拍子の音で埋まっていた。

ショウが終った時、G Iたちは思わず総立ちになり拳を振り上げた。むろん私も叫んでいた。歌と踊りが、芸というものがこんな力を持っていたとは。

12月11日。一行は、横須賀文化会館に到着

した。

佐世保と並んで設備十分な軍港、それが横須賀だ。基地の中に横須賀はある。

一行が到着する頃には、すでに60名程のG Iが待っていた。今日は、ショウの前にミーティングをやるうと言うのだ。G Iは次々に詰めかけて来る。F T AとG I、F T Aと日本人の二つに別れ、ミーティングは4時半まで続いた。私も後者のミーティングに参加した。横須賀の高校生・東海大の学生・先生・様々な人の様々な自己紹介。F T Aの連中は、その度に丁寧な拍手を送る。

ここでふと気が付いたのだが、ここにいるF T Aのメンバーは黒人だけである。何故? この疑問には彼ら自身が答えてくれた。つまり彼らはこの集会を、同じ有色人種の集会と意識しているのだ。「ブラックもイエローも、共に第3世界のために闘おう!」この言葉を聞いた時、私は思わずギクッとしてしまった。全てがアメリカナイズされ、白人化している私たち。自分が黄色人種であるなどと意識している日本人がどれ程いるか。

以下、日本青年との一問一答。
学生 F T Aの資格を話して下さい。

R・マーチソン「米軍人(男女)の援助がその主たる目的であり、芸人として運動をしています。グループには様々な人がいるが、反戦、反性差別、反人種差別の主に共闘しています。」

学生「こんどの旅の主目的は。」
P・ドネガン「むろんアジアにある米軍基地を回り、反戦G Iを励ますためである。また、行く先々で色々と学び、アメリカに帰り再び新たな闘争を組んでゆくつもりだ。」

学生「今のアメリカの運動状況は?」

R・チャンドラー「平和運動は新たな段階に来ている。学生、活動家たちの沈黙化(必ずしも悪いとは思わないが)とG I運動の非常な盛り上がりがある。特徴だろう。ベトナムから帰国したG Iたちが、それら運動を指導している。」

学生「平和のためなら、あなたがたは武器を取りますか?」

R・チャンドラー「それは愚問です。黒人は長い非暴力の歴史を歩んで来た。しかしそれはキング牧師の暗殺と共に消え去りました。白い象の上に黒いネズミが乗っかっている様なアメリカでは、武器を取らねば生きてゆく事さえ困難なのです。」

「ゴーイング・マイウェイ」という日本のバンド演奏が開始の合図であった。ショウの出しものは昨日とほぼ同じである。しかし、思わぬハプニングが起った。G I右翼(?)の登場である(フオンダに聞くと、こんな事はアメリカでは日常茶飯事で、時には目の前で

ナイフをちらつかしたり、爆弾を仕掛けられたりもするそう)。彼らは20人ほどのグループなのだが、始まる頃から舞台の袖に上りギャアギャア騒いでいた。D・サザランドが朗読するところではヤジをバンバン飛ばす。「俺たちは平和のために闘っているんだ!」「でめらに何が分るか!」PCS・ベ平連の連中(むろん私も含めて)は舞台の袖に待機している。いざとなれば隊列組んで、日本の闘争様式を御披露する構えである。しかしなんとと言っても向うはデカくて強そうである。そこへ正義の味方のG Iたちが颯爽と舞台に登場したのだ。もうこちらは拍手喝采である。舞台上は騒然。その時。R・チャンドラーがシュブレヒコールを叫んだ。「アウト!アウト!」それに答える1800人の声。なにせ多勢に無勢。チンピラG Iたちは押しまくられ、舞台からロビーへ、ロビーから寒風吹く外へと追い出されてしまった。捨てゼリフを残してすぐ帰るチンピラたち。

ただでさえ盛り上がるF T Aのショウ。こんなハプニングが手伝えれば後は盛り上がる一方である。F T Aの連中は疲労も忘れての大奮闘。それに答えるG Iたちの拳。

外は雨が降り出していた。帰りのバスの中はフツと気の抜けた空気が漂っている。公会堂からの帰り道らしい人たちがバスに向かって拳を振り上げる。その内フオンダが、日本の闘争歌を歌ってくれたと言った。「インター」「ワルシャワ労働歌」。それに答えてう歌F T Aの一行たち。

サザランドは豆電灯で台本を読んでいる。それにしてもタフな人たちだ。

彼らは翌朝9時半の便で沖縄に向った。沖縄でもG Iは彼らに拳を振り上げて応えるだろう。

F T Aと共に過した5日間、私は様々な事を見てしまった。

入管に代表される、国境というもの。人種ということ。G Iたちのあどけなさ、そして強さ。日本の活動家たちの苦勞。そして何よりもF T Aの人々の淡々とした強さ、そして大きな。私が新たな発見をしたように、彼らもこの旅で様々な事を見ただろう。

彼らは新たな計画をもう始めているかもしれない。あの腐り切った母国の中で。

私は今、心からこう叫びたいのだ、フリーF T A! ファック・ザ・アーミー! と。